

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 田中 まさき

本論文は、ソビエト期のロシア作家レオニード・レオーノフ（1899－1994）の長編小説『泥棒』の様々な版を比較しながら、作家自身による改作の実態を具体的なテキストの異同に基づいて分析し、作品世界の特質を明らかにすることを主な目的とする。

『泥棒』には、1927年に文芸誌に連載された第1版の他、その30年以上も後の1959年に大幅な増補改訂を施された第2版があるが、これまでこの両者の相違の詳細な調査に基づく本格的な研究はあまりなかった。本論文はそのような先行研究の実態を踏まえ、改訂によって生じたテキスト間の異同をまず徹底的に調べ上げるという基礎作業を前提としている。

本論文は全5章からなる。第1章は、『泥棒』の第1版と第2版に共通する基本的なプロットを抽出し、その特異な「入れ子」構造とモザイク的な構成原理を確認した。第2章は、1927年の第1版が翌1928年の単行本化の際にもかなりの程度改訂されていることに着目し、その改訂の結果不要な要素が削除され、作品構造が明確化されていることを明らかにした。第3章は、作家の岳父にあたるサバシニコフという出版者の存在に光をあて、『泥棒』執筆前後の若きレオーノフを取り巻いていた文化的環境を探った。第4章は、『泥棒』の背後にある1920年代のソビエト芸術・芸能の諸ジャンル（映画、演劇、道化、サーカスなど）を取り上げ、それが『泥棒』の独特な文学的手法と密接に関連していることを示した。そして最後の第5章では、1959年の第2版を取り上げ、第1版から第2版への増補改訂が作品のモザイク的な構造をより複雑化し、作中に存在する様々な境界を曖昧にする方向で行われたことを指摘し、この改作が政治的な理由によるものというよりは、むしろ作品の内在的な構成に関わるものであることを論証した。

このような論考を通じて、『泥棒』という実験的な作品を成り立たせるモザイク的な構成原理や「紋中紋」(mise en abyme)的な文学手法が明らかにされた。また、テキスト分析の成果と並行して、『泥棒』成立に関わる同時代の文化や芸術の文脈が浮き彫りにされたことも重要な成果である。

本論文には、田中氏自身によって電子データ化された『泥棒』の雑誌初出およびその後の4種類の刊本のテキストを収めたCD-ROMが付録として添付されているが、このデータ作成自体非常に大きな労力を必要とする貴重な基礎作業である。

研究・批評史の概観や文献目録にやや不十分な点が見られ、またテキスト分析と文化的背景の探究が十分有機的に結びついていないという論文構成上の難点も指摘されたが、ほとんど前例がないテキスト異同の詳細な分析に基づいて『泥棒』の作品世界のメタフィクション的特質を解明した本論文は、20世紀ロシア小説研究の分野に寄与する業績として高く評価されるべきである。従って審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと判断した。